

# 縦と横の人間関係を築き 新入生の意欲と思いを支える

## 静岡県 沼津市立原中学校

縦割り活動班（ファミリー学級）による上級生と下級生の縦のつながりと、生徒同士の自己開示（グループエンカウンター）を通じたクラスメイト同士の横のつながり。沼津市立原中学校は、入学直後から縦と横の人間関係づくりを目的とした活動を積極的に取り入れ、生徒の実態を把握すると共に、新入生のスムーズな中学校生活への移行を目指している。

### School Data

◎ 1947（昭和22）年開校。北には富士山を仰ぎ、南は駿河湾に面する風光明媚な環境にある。「不撓不屈」を校訓にした教育活動を展開。



校長◎ 芝 厚先生

生徒数◎ 506人 学級数◎ 16学級

所在地◎ 〒410-0312 静岡県沼津市原 576

TEL◎ 055-966-0138

URL◎ <http://www.numazu-szo.ed.jp/hara-j/>

公開研究会◎ 未定

### 課題

- 先輩や同級生との人間関係に不安を抱えて入学する生徒がいる
- 初めての定期考査が終わり、行事続きの時期を過ぎた6月頃から問題行動や不登校が増える傾向にある
- 自分の感情を表現することや相手の立場に立って考えることが苦手

### 取り組み内容

- 縦割り活動班ファミリー学級を導入。入学時から上級生と下級生を交流させ、異学年のつながりを深める（縦）
- グループエンカウンターを取り入れ、学級の人間関係づくりに役立てると共に、生徒の自己内省の機会を意図的につくる（横）

### 成果

- 一生懸命な生徒が認められる雰囲気ができ、落ち着いて学校生活を送れる生徒が増えた
- 入学当初は学級の輪に入れなかった生徒も、周囲の生徒が受け入れる雰囲気をつくることで少しずつ集団に加わるようになった
- 教科の授業や部活動以外の生徒の側面が見られ、教師の生徒理解が深まった

### 今後の課題・改善の方向性

- 新学習指導要領の全面実施に伴い授業時数が増加する中で、ファミリー学級の活動時間をどのように確保するか。その役割や機能を日常的な取り組みの中でどのように補うのか
- グループエンカウンターの手法や考え方を授業にも取り入れ、教科指導の中で人間関係をいかに築いていくか

## 6月に入ると緊張感が途切れ 問題行動や不登校が始める

沼津市立原中学校は、5年程前までいわゆる荒れた学校だった。授業中に生徒がベランダに出て携帯電話で話していたり、他校生が同校のジャージを着て校内を歩いたりしていたこともあるという。そうした状況の中、同校は数々の取り組みを講じてきたが、その柱に据えてきたのは「一生懸命に取り組む姿勢を認め合う」文化の醸成だ。大川裕司教頭は次のように説明する。

「当時の本校には、リーダー役を担おうとする意欲のある生徒や真面目に取り組む生徒を、認めようとしないう雰囲気がありました。荒れていたといっても、深刻な問題を抱えていたのはごく一部の生徒です。しかし、大半の生徒は、その一部の生徒がつくり出す雰囲気に流されていました。そこで、『一生懸命に取り組むことは格好いい』を合い言葉に、努力する姿勢を認め合い、支援し合う雰囲気のある学校にしようとなりました」

校区には旧街道の宿場町があり、古くから住む家庭と移住してきた家庭が混在する。保護者の職業も農業や会社員など多種多様で、共働きの家庭も多い。新入生に関しては、校区にある2つの小学校との連携を進めてきたことよって、中学校入学時点の生徒の落ち着きは随分改善されてきた。しかし、小学校

時代の友だち関係や家庭でのつまづきを、中学校に持ち越して入学してくる生徒は依然存在する。

そうした生徒も、「中学校で変わろう」という意欲や期待を持っている。しかし、不安と緊張感の中で過ごす4月、行事や初めての定期考査が続く5月を過ぎ、6月に入ると次第にそれまでの緊張感が途切れて疲れが見え始め、問題行動や不登校が出てくるという。1学年主任の塩澤清孝先生は、導入期指導の基本的な考え方を次のように話す。

「入学直後の新入生の意欲や思いを受け止めて支える雰囲気を、学級や学校全体でいかにつくっていくかを大切にしています。よい雰囲気があれば、生徒はスムーズに中学校生活へ移行できます。これが3年間の中学校生活が大きく左右すると捉え、その観点から導入期指導を組み立てています(図1)」

### ファミリー学級で新入生が 上級生と積極的に交流

同校の導入期指導の大きな特徴は、入学直後から上級生との「縦」のつながりを積極的に深めることだ。交流の場となるのは、10年間に新しく組織し直した3学年の縦割り活動・ファミリー学級である。特活指導部長の永井豊二先生はそのねらいを次のように話す。

「学校が荒れていた頃は、出来るだけ異学



沼津市立原中学校校長  
芝 厚 Shiba Atsushi  
「教師の成長が子どもの成長につながる。そのために、自分を日々磨いていきたい」



沼津市立原中学校教頭  
大川裕司 Okawa Yoji  
「生徒が30歳、40歳になった時に、社会人として生きていける力を身に付けさせたい」



沼津市立原中学校  
永井豊二 Nagai Toyoji  
特活指導部長、3学年担任。「いろいろなタイプの人間の良さを認められる人になってほしい」



沼津市立原中学校  
塩澤清孝 Shiozawa Kiyotaka  
1学年主任。「他者とのかわりの中で生きていることを自覚し、身近な誰かを照らせる大人になってほしい」



沼津市立原中学校  
長田成伸 Nagata Shigenobu  
1学年担任。「生徒一人ひとりが安心して学校生活を送れる環境をつくりたい」

年の交流を遮断するようにしていました。新入生が悪い意味で上級生を見習い、負の連鎖が生まれてしまうことを回避したかったからです。しかし、生徒同士をいつも引き離しては、学校全体が活性化されないと分かってきました。『離す指導』から『つなげる指導』へ、生徒の自主性を生かす方向へと転換しようと考えました」

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第4回

# 「中学生にする」導入期指導の工夫

図1 導入期指導の流れ

	4月	5月	6月	7月
ファミリー学級	<ul style="list-style-type: none"> <li>●リーダー講習会</li> <li>●上級生による新入生のリーダー指導</li> <li>学級委員の役割確認、ファミリー学級発足式に向けての打ち合わせ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ファミリー学級発足式</li> <li>●ファミリーネームの発表</li> <li>●ファミリーごとに活動内容を検討</li> <li>先輩から後輩への勉強の仕方の伝授、協力清掃、交換合唱会の開催など</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●2年生の高原合宿、3年生の修学旅行の迎え入れ</li> <li>●掲示物を通したメッセージの交流</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>異学年の結び付きを、文化祭や生徒会活動などに生かす</li> </ul>
グループエンカウンター	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ことばがし</li> <li>●新しい仲間との接点、関係づくりをする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●よいことカード</li> <li>●他の生徒の良さを探し、自分の言動を客観的に振り返る</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒同士の関係と、教師の生徒理解を深める</li> </ul>
1年生全体の活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>●学級開き</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●遠足</li> <li>●親睦を深める</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●教育相談</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●三者面談</li> </ul>
学校全体の活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>●対面式</li> <li>●生徒会オリエンテーション</li> <li>●教科リーダー会</li> <li>●生徒総会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●中間考査</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●期末考査</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●3年生を励ます会(部活動 社行会)</li> </ul>

\* 同校の資料を基に編集部で作成

ファミリー学級では、3学年混合で行事や活動を共に行うだけでなく、行事の前後に上級生と下級生がメッセージを交換する（P. 20工夫①）。

「ファミリー学級の行事を通して先輩・後輩の人間関係が出来ても、普段の生活では薄れてしまいがちです。学級の掲示板などを活用し、行事での経験を毎日の学校生活に少しでも生かせるようにしました」（大川教頭）

メッセージは各教室の後ろの掲示板に貼っており、休み時間などに1年生が先輩のコメントを探している姿が見られるという。

「先輩との接点を増やしたことで、3年生の上級生としての自覚が高まりました。新入生の中には言葉遣いなどが分ならず、なれなれしい言動をする生徒もいますが、そうした生徒もきちんと受け入れながら後輩を引っ張っていく姿が見られるようになりました」（永井先生）

1年生は入学直後から、直接的・間接的な活動を通して上級生を知る機会が増えたことで、上級生に対する先入観や不安を早期にぬぐい去ることが出来るようになった。最近では、上級生と良好な関係を築けるようになったことで「ああいう先輩になりたい」と憧れを抱く良い循環も生まれている。

**互いの気持ちを引き出しながら安心でき、居場所のある学級に**

縦のつながりと共に重要なのは、学級での「横」のつながりだ。そこで同校が心掛けているのは、まず「学級を安心できる、居場所のある空間にする」ことである。

1学年担任を務める長田成伸先生は、「居場所が出来て初めて次のステップへ進めると考えています。最初は生徒同士、次に生徒と教師の距離を縮めていくことを意識しています」と話す。11年度に赴任した長田先生は、

08年度から2年間、大学院に通い、問題行動を未然に防ぐための生徒指導を研究した。その知見を生かして、グループエンカウンターを取り入れた生徒同士の人間関係の構築や生徒把握を進めている（P. 22工夫②）。

「以前は、中学生になってから問題が顕在化するだけで、原因は小学校時代や家庭環境にあるのではないかと思っていました。そのため、生徒の過去の経験や体験を出来る限り把握した上でどうかかわっていくかに注力していました。が、大学院での学びを通じて、中学校から出来ることをしていこうと考えを切り替えました。グループエンカウンターのエクササイズは互いの気持ちを引き出しながら人間関係づくりを進める上で効果的ですが、1回取り入れたからといってすぐに大きな変化が表れるわけではありません。繰り返し、粘り強く取り組んでいます」（長田先生）

グループエンカウンターの授業は、当初、長田先生が1人で始めたが、今では学年全体での取り組みへと広がっている。

「『まずはやってみよう』と誰かが何かを始めることが、前向きに捉えられるのは本校の良さだと思います。それがマイナスの方向に行くこともあるかもしれません。しかし、何もしなければ前には進めません」（塩澤先生）

次ページからは同校の導入期指導の特徴であるファミリー学級とグループエンカウンターを取り組みを具体的に紹介する。

# 工夫① ファミリー学級で縦（異学年）の関係を育む

## 中間層の生徒を リーダーとして育てる

ファミリー学級の組み方は、単純な学級の縦割りではない。11年度は、1年生6学級、2・3年生各5学級の全16学級を、4つのファミリーに組み替えた。

ファミリー学級の1年間は、「リーダー講習会」から始まる。11年度は入学直後の4月に開いた。講習会の対象者は、各学年の学級委員長と副委員長、専門委員長、生徒会本部の計63人だ。ファミリー学級は4つだが、これだけ多くの人数を集めるのは、出来るだけ多くの生徒にリーダー的な考え方を持たせるためでもある。

「どの学校にも課題のある生徒はいるものです。彼らを育てていくためには、まず落ち着いた生徒集団をつくる必要があります。リーダー、その鍵となるのはリーダーとリーダーを支える中間層の生徒を育てることです。リーダーが周りから支援されずに孤立してしまうと、集団の雰囲気が悪くなってしまいます。逆に、『リーダーをやりたい』と思わせる雰囲気があれば、中間層にもリーダー的な考えを持つ生徒が増えます。学校全体にそうした前向き

な雰囲気が出来ると、課題のある生徒も落ち着いていきます」（永井先生）

## 部活動で規律と人間性を、 ファミリー学級で社会性を育む

1か月後の5月には「ファミリー学級発足式」を開く。ここではファミリー学級を構成する各学級の目標の紹介などを行う。

通年の主な活動に、上級生と下級生のメッセージの交換がある。例えば、3年生が修学旅行から帰ってきた時、1年生は「お帰りなさい」のメッセージを1人ずつ書いて模造紙に貼り、ファミリー学級の3年生に渡す。合唱祭の時には先輩の歌についての感想をつづつて渡す。逆に、3年生も1年生の行事の前後にメッセージを一人ひとりに書いて渡す。

メッセージを持つていくのは、学級委員長ら生徒自身だ。1年生は最初、担任に付き添ってもらい恐る恐る3年生の教室に向かう。入学当初の1年生にとって3年生は大人のような存在で、3年生の教室の階に行くだけでも緊張するものだ。しかし、実際に教室に行ってみると、3年生は拍手をして、1年生を温かく迎え入れてくれる。1年生はこうした経験を通して、今後の中学校生活への安心感を

抱いていく。

「3年生と身近に接することによって、1年生は『自分もああいいう3年生になるんだ』と中学校生活の具体的なイメージを持てるのです」（大川教頭）

また、前期と後期に各1回、ファミリー学級単位の行事を開催する。前期はファミリー学級単位の海岸などを清掃する「校外清掃」で、後期は生徒会主催のレクリエーション大会をファミリー学級対抗にして、5・6時間の2時間にわたって実施する（写真1）。

元々、中学校には部活動という、異学年の縦割りによる活動がある。しかし、部活動は先輩・後輩の上下関係が厳しくなりがちだ。これに対して、ファミリー学級は上下関係が緩やかだ。芝厚校長は、部活動とファミリー学級の違いを次のように説明する。

「部活動は同じ目標や夢を持つ生徒の集まりであり、規律や人間性が育つ場です。一方、ファミリー学級はさまざまな性格を持った生徒の集まりであり、社会性を育む場と捉えています。どちらも昔は地域社会に存在していましたが、今は学校の中で育てていくことが大切だと考えています」

活動後の生徒の感想には、「ファミリー学

「授業」で生徒を、学級を伸ばす

第4回

## 「中学生にする」導入期指導の工夫



写真1 11月下旬、5・6時間目の2時間かけて行われた生徒会主催のレクリエーション大会。4つのファミリー学級対抗形式で生徒たちは球技などを楽しんだ。企画運営は生徒会に全面的に任せ、教師はほとんど口出しをしない

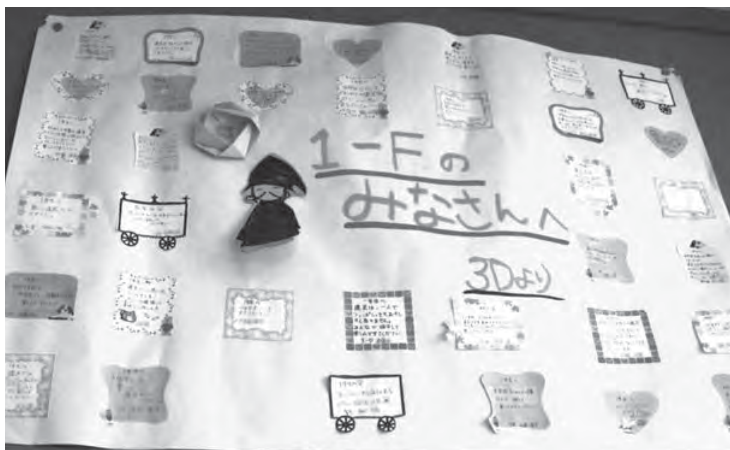


写真2 1年生の教室の後ろには、同じファミリーの上級生がつづったメッセージが貼られている(写真は3年生のメッセージ)

級での先輩は、部活動での厳しい姿とは違い、面白く親しみやすかった。自分も3年生になったら下級生を楽しく引っ張っていきたい(1年生男子)などがあり、人には多様な面があることを理解する場にもなっている。永井先生は「多くの1年生はファミリー学級で部活動以外での先輩の姿を見て、『あの先輩にはこういう姿もあるのだ』と他の面に気付くようになります」と話す。

教室の壁には、同じファミリーの上級生から送られたメッセージが貼られている(写真2)。これも、上級生を日常的に感じやすく

するための工夫だ。同校は、こうした掲示物の活用を特に重視している。

### 生徒が相談できる教師が増え 教師間の連携も深まる

ファミリー学級では、ファミリーを構成する各学年の担任が活動にかかわるため、生徒と教師の関係を広げる効果もある。例えば、ファミリーのリーダーの会合では、主に3学年の担任が支援に入ることが多いが、不在の時には2学年や1学年の担任が入る。すると、ファミリー学級のリーダーは他学年の教師と

もかわりが生まれ、相談しやすくなる。

ファミリー学級は、教師にもよい効果をもたらしている。新たに異動してきた教師は1学年を担当することが多いが、同校の指導方法がどういものか分からない。教師の間にも、ファミリー学級という学年を超えた縦のつながりを通して、他学年の指導方法を学びやすい関係が生まれている。

このため、ファミリーを構成する学級担任の顔ぶれは、特別活動担当の教師、ベテラン教師、若手教師といったバランスを考慮したものになっている。

### 授業時数が増える次年度以降 活動をいかに深めるかが課題

今後の課題は新学習指導要領への対応だと、芝校長は話す。

「本校には、ファミリー学級活動を含めて行事が多くあります。今後は、授業時数の増加にどう対応して教育課程を組むかを検討する必要があります。現時点では、ファミリー学級の活動を日常的な清掃活動などに取り入れることも考えています」

学校行事が多いことで、教師に負荷がかかっていることも課題である。

「先生方の善意で成り立っているところがありますが、それに甘えてはいけません。職員会議の効率化など校務全体を見直して、工夫していきたいと思います」(大川教頭)

# 工夫② グループエンカウンターで横(学級)の関係を構築

## 「よいことカード」を通して 自分自身の内面を見つめさせる

長田先生は、月1〜2回の割合で、学級活動や道徳の時間などにグループエンカウンターのエクササイズを取り入れている。入学直後は人間関係づくりのきっかけになるようなエクササイズを取り入れ、学級内の人間関係が落ち着いていくにつれて、徐々にその内容を自分の内面や他者に深くかかわるものに移行していく。

4月の入学直後に行ったのは「ことばさがし」というエクササイズだ。これは、6人でグループを組み、長田先生が五十音の中から選んだ1文字から始まる言葉を出来るだけ多く探していく活動で、ランダムに選ばれたメンバーとの交流を深めていくのがねらいだ。5月には「よいことカード」というエクササイズを実施する(図2)。

「エクササイズでは、接点がありません。生徒とペアを組むこともあります。そうしたクラスメートにもメッセージを書く必要があると同時に、自分もあまり知らない生徒からメッセージをもらう立場になります。入学直後の新しい人間関係の中で自分がどのように

図2 「よいことカード」の進め方と指導のポイント

段階	授業の内容と流れ	
1 出合い	● 行事での生徒の頑張りが印象に残ったことを話す	本時の方向付けの場面なので、目的を丁寧に説明する。授業の見通しを持たせることで、生徒の意欲を高める
2 エクササイズ (1)説明	● 「よいことカード」の説明をする 第1段階 ① くじを引き、引いた人の頑張っていたところを見つけ、カードを書く * 1人1枚 ② カードをプレゼントする 書いた人のところへ行き、書いた内容を読み、手渡す 第2段階 ① 行事を振り返って、自分が頑張っていたと思う人にカードを書く * 1人1枚 ② 回収して、掲示用とする	書いた本人と受け取る相手、授業者の3人しか見ないことを伝え、相手が異性でも素直な気持ちで書くよう指導する
(2)くじ引き	● クラスの全員の名前が書かれたくじを引く 誰からももらえない生徒が出ないように、くじ引きなどで書く相手を決める	生徒全員が最後まで伝えたかをきちんと見取る。1人でも取り組まない生徒がいると、なし崩し的に他の生徒も取り組まなくなるので、緊張感を持たせる
(3)カード記入①	● くじに書かれていた人が、行事で頑張ったことやよかったことを、カードに記入する	
(4)カードをプレゼント	● 書いた相手にカードをプレゼントする * 声を出して相手に伝えるように読む * 机間巡視をしながら、声を掛けるようにする→恥ずかしがって読まない生徒が出ないようにする	「他人の悪いところばかり気になり自分本位だったけれど、他人の長所をうまく探せない自分に気付きました」など、活動の良さが分かるようなコメントを書いた生徒に発表してもらう
(5)カード記入②	● 今度は、自分が書きたい相手を決め、カードを書く * カードを回収し、掲示用にする	
(6)シェアリング	● カードをプレゼントされた時にどんな気持ちがあったかを書かせ、全員の前で何人かの生徒に発表してもらう	「意外な生徒が自分のことを見てくれて驚いた。うれしかったという感想がありました」など、生徒が次の活動に前向きになれるようなコメントをする
3 まとめ	● 授業者が授業の感想を話す * 活動の様子、感想、まとめなどを伝える	

\* 同校の資料を基に編集部で作成

## 「中学生にする」導入期指導の工夫

思われているか、また自分がどれだけ周りの生徒のことを考えられているかを知る機会になります」（長田先生）

長田先生の学級では、普段の生活班もくじ引きなどでランダムに決めている。

「生徒は、始めは緊張したり、気まずい思いをしたりするかもしれませんが、新しい人間関係の中で意外な共通点が見付かり、関係が深まることもあります。導入期からこのスタイルを取り入れることで、どのような関係の友だちとも話せるようにならないといけないことを伝えます。中学校では友だち関係は席替えに配慮されなれないと思わせてしまうのです」（長田先生）

エクササイズの際には、よく話す生徒、聞き役の子、あまりかわからない生徒が出てくることもある。そこで、順番に話していくようなルールにしておく。

「皆で話をしやすいテーマを設定したり、みんなが話せるようなルールを決めたりしても、1人になりがちな生徒はいます。大切なのは、その生徒が1人になっていることではなく、その経験を生徒本人や周囲の生徒がどう捉え、どう生かすかです。グループエンカウンター授業では、さまざまなテーマを通していろいろな立場を経験する中で、他人を思いやる気持ちを持つてほしいと伝えていきます。1人になりがちな生徒は、誰かの何気ない一言でほっとしたり、助けられたりするも

のです。次は自分が声を掛ける側として、経験をつなげてほしいと思います」（長田先生）

### 教科の授業の中で更に 関係を深める機会を増やしたい

10月には「クラスの中の自分」というエクササイズを行った。これは、自分や仲間の長所を探していくものであり、生徒の自己肯定感を高めていくのがねらいだ。

「今日の授業はきつかった」。授業後、普段は積極的に発言するムードメーカーの生徒が、こんな感想を書いてきた。

「何も問題がないように見える生徒でも、実は自分の内面について悩みを抱えていたり、自分の気持ちを上手く表現できずに葛藤したりしていることがあります。教科の授業や部活動では見られない生徒の側面を意図的に引き出すことで、生徒理解を深めることが出来ます。生徒の感想を見ながら、次のエクササイズの改善につなげていきます」（長田先生）

入学当初、班から離れて1人で給食を食べるような生徒がいた。しかし、11月のグループワークではグループに加わり、周りの生徒とも話が出来るようになっていた。その生徒にとって学級が少しずつ居心地の良い空間になってきている証しといえるだろう。

長田先生はグループエンカウンター指導案を学年団の教師に渡して共有しており、「よ

いことカード」は学年全体で取り入れた。10月からは学年全体で足並みをそろえて取り組むようにしている。

芝校長は、こうした人間関係の構築が学習面にも良い影響を与えると考えている。

「健全で豊かな人間関係の基盤があつてこそ『分かり合う』授業が出来ます。生徒同士が互いを知り、協力できる関係を導入期から深めていくことは、学習面にも大いに役立つと考えています」

今後は授業の中で互いを知り、高め合える学びの実現を目指していく予定だ。

### 芝校長が考える校長の役割

中学校3年間という時間は決して長い期間ではありませんが、生徒には中学校生活の中で出来る限り多くの経験を積んでほしいと思っています。そして、教職員全員で、生徒が見せるうれしそうな表情、真剣に取り組もうとする表情、感動し涙する表情、やり遂げた達成感のある表情などを見取り、支援していきたい。

そのためにも、校長として自分自身を磨く努力をしながら、先生方の力を結集し、常に前向きに物事に取り組む、生徒にとってより良い環境を築いていきたいと思ひます。